

# 作業療法に潜在するロマン主義的な精神 —道徳療法における理性と感情に関する考察を通して—

加藤 智也

## Spirit of Romanticism hidden in Occupational Therapy : A Consideration on the Reason and Passion in Moral Therapy

KATO Tomoya

### 抄 録

本論は、はじめに英国の作業療法の創始期に芸術と手工芸の治療的な力に関するロマン主義的な前提があったとする文献を紹介する。次に、道徳療法の背景にある啓蒙主義的な理性について考察する。その際、ギリシア語のロゴスはラテン語に移されるときに、ラティオともう一つ別のヴェルブム *verbum* という2語に分かれて受け継がれたということに着眼した。道徳療法の理性は、ラティオだけではなく、ヴェルブムの流れにあると考えられた。また道徳療法の理性には感情が伴うこと示すことにより、道徳療法の開拓者にはロマン的な思考が潜在していることを示した。作業療法士は合理的な思考を用いるが、潜在的にロマン的な思考が伴うことによって、より豊かな実践が可能になると考えた。

キーワード：作業療法

ロマン主義

アーツ・アンド・クラフツ運動

道徳療法

理性

ヴェルブム

## はじめに

かつて教育学者のオットー・F. ボルノー (Otto Friedrich Bollnow) は、「どのような教育学においてもある一定のロマン主義的な精神は欠くことのできないものである。もしも教育学が、まったく合理的に規定しつくされた生活という殺風景な味気なさのなかに沈み込んではいならないならば。」<sup>1)</sup>と述べた。この言葉にある「教育学」を「作業療法」に替えて読み直すと、作業療法士にとってこの言葉は、現在においても貴重な提言となる。障害や問題点を確定すること、目標や治療手技を効果的に設定することは、それが合理的であるほど生活の中に息づく作業の意味を剥奪するように思える。豊かな作業療法にロマン主義的な精神が必要とされるならば、それはどのような精神であるのか。この問いは同時に、この言葉の中でその対極に置かれる合理的とは何かという問いでもある。本論は、ロマン主義的と合理的という2つの傾向に着眼することによる、作業療法前史にみられた社会的な運動に関する解釈学的な考察の試みである。

作業療法はしばしば、科学 science であると同時に芸術 art であるともいわれる。これはたんに作業療法が治療手段として芸術を用いることがあるということではなく、また医術全般が科学技術 technology だけではなく技 art という側面を持っているように、作業療法士の技術もまた技 art という側面をもつ、ということに止まらない。作業療法を理解するには、芸術的、もしくは美学的・感性的 aesthetic な理解が必要であると思うが、このような理解が深められることは少ない。本論は広くいえば、作業療法が芸術であるという側面に向き合うための緒の探索である。

また、作業療法の作業とは文化的なものであると位置づけられている。筆者はこれまで作業療法教育における人文学 humanities の重要性について考察してきた<sup>2,3)</sup>。作業療法の実践は、近代に急速に発展した自然科学だけではなく、歴史的に遥かに永い伝統によって育まれた概念や発想に支えられている。本論は、作業療法の作業は文化的なものであるということだけではなく、作業療法そのものが文化的な活動であるということを示すことも意図している。

これら作業療法の全般的な前提を考察するときに、作業療法という発想が生まれた起源を明らかにすることは重要な手がかりになる。現代の医療制度の中で作業療法、もしくは occupational therapy と名づけられたものだけではなく、広く作業を用いる医療的な実践を視野に入れるなら、そのような実践は歴史的にみれば多数存在する。これら作業療法的な実践を生んだ背景には、作業活動に価値を見出し、その価値を表現して創造するという活動があり、そこには伝統とともに各々固有の時代、地域において養われた感性や思想があったであろう。作業療法が人文学的・歴史的な背景に支えられているというときに、これらを飛び越えて普遍的・抽象的な説明を求めてはならないのであって、作業療法的な実践を実現した具体的な精神史の解釈を続けなければならない。本論では、英国の作業療法の創始期にロマン主義的な前提があったとする文献を手がかりにして、作業療法の前身である道徳療法の背景にある啓蒙主義的な理性について考察しよ

うと思う。

## 英国における作業療法のロマンス

作業療法士の Clare Hocking は2007年に、『作業療法における現在の論点—リーズニングとリフレクション』という本の一節で『作業療法のロマンス romance』<sup>4)</sup>について論述している。この中で Hocking は、英国における作業療法専門職の黎明期、1930年代後半から1950年代の専門職の先駆的な時期に、作業療法はその経過と達成に関して「ロマン的 romantic な前提に満ちていた」ことを見出し、作業療法の起源が「ロマン主義 Romanticism」にあると主張する。そして「芸術 art と手仕事 craftwork の治療的な力に関する専門職のロマン的な前提」について、「核となる概念は、人々の創造性を解放することが、無能力、入院、産業労働という人を無意味にする影響を超越するよう援助するということにある」と述べている。

### ロマンスとロマン主義の概観

上の引用にある romance、romantic の語は日本に移入され、すでに「ロマンス」、「ロマンティック」という日本の言葉としても通用しているが、私たちにとってそれらは甘く感傷的な幻想や恋愛、物語のイメージが強い。しかし元の英語は、ヨーロッパの中世から続く歴史的な展開の中で実に重層的な意味を担っている。またロマン主義 Romanticism は、これら語の歴史を内に含むものであり、このような知的伝統の外にある人間にとって容易に理解できるものではない。ここでは、島岡茂による『ロマンティックの歴史』<sup>5)</sup>に関する論述から、本論の考察に示唆的である部分を拾い、これら語の多義的な含意の一端にふれようと思う。英語の romance は14世紀にフランス語の romans から来ている。ロマンスの初期の意味は、「ローマ風の言語」、「古典的なラテン語に対して、俗化した地方的なローマ語」さらに「フランスの土語」をも意味するようになる<sup>6)</sup>。そしてロマンスは「言語の意味から、その言語で書かれた物語の意味」<sup>7)</sup>へと移行する。これら語史の中で、ロマンスの「物語」という意味に、都会ではなく地方の、土着的、庶民的、牧歌的なイメージが伴い、生活のなかで生きている「ことば」、「語り」の含意があるのだろう。また島岡は、ラテン語の「有生性（男・女性）の強さ」を指摘したうえで、ロマン語の起源である俗ラテン語をうけいれた「民衆の意識の底にひそむ万有精神論的基盤」<sup>8)</sup>を認めるという。ロマンスには従って、固定的な物体や抽象的客観的な概念の記号的表現というよりは、生命的で感覚的情緒的な心情の「ことば」であり「語り」であるというニュアンスが潜在するのだろう。

さて、論文『作業療法のロマンス』であるが、当の Hocking はこれら語について特に論じているわけではない。文面からすれば、romance は「物語」という意味で、作業療法の専門的客観的な側面ではなく抒情的な側面を示しているのだろう。また背後に「ロマン主義的な傾向」という意味が隠されているように思う。一方 romantic は「ロマン主義的な傾向のある」という意味が強い。romantic は辞書によれば「ロマン派の、

ロマン主義の」も示すのだが、ここでは上に述べたニュアンスも込めて「ロマン的」と訳し、romance はそのまま「ロマンス」としている。

もうひとつ「ロマン主義 Romanticism」であるが、これは18世紀末から19世紀半ばにかけてヨーロッパに広がった文学・芸術・思想上の思潮である。「最後の大きな文化の一時代」といわれるように、ひとつの統一のある主義や思想の学派というよりは、一時代の広域に及ぶ文化的知的な運動・傾向といえよう。時代の流れとして18世紀の啓蒙の時代に対する反動であり、啓蒙の「理性」に対して、個々人の「感性」と「想像力」の優位を主張し、心情、直感、体験、旅、太古、愛などがキーワードであった。既成の社会体制や近代文明への反抗と自然の中への逃避、不合理なもの、神秘的なものへの憧憬なども主題となった。Hocking 自身の説明によれば、ロマン主義の特徴は「主観的、非合理的 (非理性的) irrationality、個人的であること、そして靈感 inspiration が経験、感情、自然から生じうるという信念を強調した」<sup>9)</sup> ことにある。

#### アーツ・アンド・クラフツ運動と作業療法

作業療法の起源の1つはアーツ・アンド・クラフツ運動 Arts-and-Crafts Movement にあるということは、1987年に作業療法士の Ruth L. Schemm<sup>10)</sup>によって詳しく論じられている。Schemm は、20世紀初頭のアメリカの初期作業療法が、アーツ・アンド・クラフツ運動と共に展開したことについて述べている。また、アーツ・アンド・クラフツ運動の起源が、英国の美術評論家であるジョン・ラスキン (John Ruskin 1819-1900) にあり、彼が「機械と工場の働きは人間の幸福を制限すると主張した」ことを強調する。そしてすでに次のように指摘している。ラスキンは「現代の官僚的で産業的な構造によって複雑になってしまった経験ではなく、“より真正 more authentic” であるような経験を含む、より単純な生活に戻るように論じた。ラスキンはロマン的であり、人類がその環境・仕事・宗教的価値と十分に関わり、より健康的であったと言われている時代を振返っているのである」。

そして『作業療法のロマンス』であるが、Hocking は英国の作業療法もまたアーツ・アンド・クラフツ運動の影響を受けたこと、さらにその運動のロマン主義的な精神が作業療法の前提になっていることを強調した。Hocking は Schemm と同様に、ラスキンを引用しながら作業療法のロマン主義的な前提について、「美しいものを手で作ること crafting は、自分たちの精神性 spirituality と創造性を高め、その対象を感情的に表現し自己決定することを可能にする」と述べる。そして近代の産業労働はこれとは反対の性質を持つことについて、ラスキンの『ヴェニス石』から以下の文 (一部省略) を引いている。

われわれは、かの分業 (労働の分割) という偉大な文明化された発明についておおいに研究して十分に完成させたのだが、結局それはわれわれがこれに虚偽の名前を与えているということだけであった。それは分業という名前ではなく、本当のことをいえば、分割されたのは労働

ではなく、人間であったということだ。一人間がたんなる人間の碎片に分割されたのだ—生命の小破片と屑片とに粉碎されたのだ。…さて、まことに、1日にたくさんのピンを製造することはよいことで望ましいことだが、もしそのささいなピンの先端がどんな結晶の砂で磨かれているかを見るなら—それは人間の魂の砂なのだ—、そこにはまたなんらかの喪失があることを忘れてはならない。<sup>11)</sup>

そしてこの引用の先に、ラスキンは近代の労働では失われた本来の労働の意義について、「一個の生きた魂を輝かせ、強くし、精練し、かたちづくること」<sup>12)</sup>と述べている。そしてこの『ヴェニスの石』の序文に、ウィリアム・モリス (William Morris 1834-1896) が寄せた文には「ラスキンがここに教える教訓は、芸術は人間の労働の喜びの表現であるということだ。人間にとって自分たちの労働を喜ぶことは可能なのだということだ、けだし今日いかにわれわれにそれが不思議にみえようとも、人間にはその労働を喜んだ時代があったからだ」<sup>13)</sup>とある。モリスはラスキンに影響されアーツ・アンド・クラフツ運動を主導した英国の詩人、思想家でありデザイナーでもある。彼は産業革命後の大量生産を批判し、中世の手仕事に帰り、生活と芸術を統一することを主張した。この序文で注目すべきは「芸術は人間の労働の喜びの表現」ということであろう。

ラスキンやモリスが見ていたのは当時の工場での労働であり、産業形態が情報やイメージ操作へと移行して多様化する現在において、このような批判はどのような意味を持つのだろうか。現代では一層見えにくくなった「人間の労働の喜び」とその「表現」としての「芸術」とは何か。ここでは深く立ち入らないが、「生命」「魂」を粉碎する近代の労働、つまり「分割」に対して、「感情」や「かたちづくる」という働きを媒介にした「芸術」「労働」「宗教」が一体的な生活というものが考えられていた、ということは確認しておきたい。現代において精神の「分割」は、尚一層深刻であると思われるからである。

Hocking はモリスについて次のように紹介する。「モリスも…ラスキン同様にロマン主義であった。モリスはロマン主義の哲学をアーツ・アンド・クラフツ運動の考えに取り入れた。特に彼は、美と実用のかたち objects を作ることに自分の魂 soul を注ぐということに向かい、自分の感情を十分に生き、創造を通して人間の可能性を解放することによって、感情と精神の本質 spiritual essence を発見する可能性に思いを巡らせた。かたちを手で作る crafting an object ときに、工芸家 craftsman は自分自身を作る craft ということをもリスは確信していた」<sup>14)</sup>。

そして初期の作業療法の文献には、このようなモリスの思想の影響が容易に見出されるという。そこで特徴的であるのは、「感情」への志向が明らかであることと、患者の治療効果が「転換 transform」として描かれているということである。障害により希望を喪失した者が、なんらかの芸術や工芸を身につけるという単純な手法によって、精神 spirit の再生がえられると考えられた。そこには「crafts と arts には何か神聖なものがある」<sup>15)</sup>という信念が共有されている。このような患者の「転換」の表現は、測定可能

な変化に限定する「合理的」な説明を求められることによって、徐々にではあるが減少する。

### 作業療法の合理主義とロマン主義

『作業療法のロマンス』に続いて Hocking は2008年に一連の3つの論文<sup>9,16,17)</sup>を発表し、これらの中で作業療法の哲学的な基礎について、「合理主義 Rationalism」と「ロマン主義 Romanticism」という相反する2つの傾向を対比させることで英国の作業療法の歴史を解釈している。そして英国の作業療法の先駆的な時期である1938年から1962年間の文献研究から、初期のセラピストたちは、合理的な方法とロマン的な方法によって思考していることを示した。ロマン的とは上に示した通りであり、合理的とは現在の作業療法士の思考方法であるといってもよいだろう。Hocking は、合理性は作業療法が技術的専門性を保つために入念に加えられたものであり、思考に関するロマン的な方法と合理的な方法はそれぞれ力と限界を持つが、それらは初期においては相互に絡み合い力動的なバランスを保っていたという。

作業療法が社会の中でひとつの役割を担い、その公共性を保とうとするときに作業療法の合理性を示すことは当然必要とされる。この点からいえば、ロマン主義の主要な特質は非合理性にあり、単に作業療法がロマン主義的であると主張することは、作業療法士が専門職という社会的な位置を放棄することに等しい。Hocking は英国作業療法の歴史解釈にあたり、合理主義とロマン主義を対比させたわけだが、Hocking が指摘するように初期にみられたロマン主義的な表現や思考は専門職発展の途上で衰退して現在に至る。これは科学的合理性を旨とする専門職集団の少なくとも社会的な表層においては当然の成り行きであろう。またこのような歴史的変遷はかつて Gary Kielhofner<sup>18)</sup>が繰り返し述べていた指摘、つまり初期作業療法にみられた人間に対する全体的な視点から、1940年代後半から1950年代における科学的合理性の確立に向けた還元主義的な機械論的パラダイムの受容という過程と同様である。しかし現代の専門職にとって否定的な意味をもつ非合理性を称揚するロマン的な思考への着眼は、Kielhofner による全体的視点の再考にも増して、作業療法という特異な発想の起源を探るときに尚一層の重要性をもつと思われる。

## 道徳療法における理性

### 啓蒙の時代と道徳療法

20世紀の作業療法を対象とした Hocking の研究からは離れるのだが、ここで「道徳療法 Moral Treatment」というもうひとつ別の作業療法の源流について検討する。作業療法という発想の起源のひとつは19世紀ヨーロッパの道徳療法にあったということはこれまでにしばしば指摘されてきたが、道徳療法は主に18世紀の啓蒙主義の所産であるという見方はあまり知られていない。18世紀のヨーロッパは「理性の時代」といわれ、啓蒙の合理主義の時代である。作業療法の源流について単純に考えれば、これまでに見

たアーツ・アンド・クラフツ運動のロマン主義と、道徳療法の合理主義との2つの相反する傾向から作業療法は生まれたことになる。

道徳療法は精神障害者の収容施設における人道的な処遇改善の運動、人間的な環境の整備全般に関わる実践であった。作業療法 Occupational Therapy という用語は20世紀に入って確立していくが、19世紀においては道徳療法の一構成要素として実質的に作業療法が実施されていた。道徳療法は概括的にいえば、人道主義者の熱意による短命な功績であるとか、一般市民の道徳性の合理化であったともいわれる<sup>19)</sup>が、人間の徳性に着目し、精神と環境の問題に総合的に取り組んだ実践は、今日の専門分化する作業療法士にとって学ぶべき点が多い。

啓蒙主義は、ロマン主義に先行して主に18世紀、ヨーロッパ全体に広がった運動である。「啓蒙 Enlightenment」は、もともと「晴れる」こと、太陽の光によって明るく照らされた世界を意味する。啓蒙主義は「理性の光」によって旧弊や偏見や障害を取り除く知的運動であり、啓蒙の時代は、近代科学の普遍的な知識が土着の生活知を覆い始める時代でもある。啓蒙主義はロマン主義と同様に一様ではないが、ロマン主義は啓蒙主義への反動であるともいわれている。

合理主義 rationalism はラテン語のラティオ ratio に由来し、この語は「理性」を意味するので、rationalism は理性主義と訳されることもあり、この場合は合理と理性は同じラティオの意味を担うことになる。合理・理性は古代から繰り返し主題化される概念であり、合理主義も特定の時代に固有のものではない。ここで問題とする啓蒙の合理主義は、「〈それ自体において合理的秩序をそなえた客観的世界〉と〈漸進的にはあれ、その秩序に近接しうる能力をそなえた理性主観〉」<sup>20)</sup>とが想定されていたとみてよいだろう。19世紀には、客観的物質的な世界における「科学的合理主義」が優勢となり、理性は実践的、倫理的な面も含めて社会を合理的に形成していくという姿勢へと高まる。ふつう英語で理性は reason であるが、この理性は、自然と対立する人間の認識主観の側の思考・判断力を指すことが多い。

### 道徳療法の合理主義

フィリップ・ピネル (Philippe Pinel 1745-1826) はフランスの精神医学者であり、近代精神医学の基礎をつくり、精神病者の「鎖からの解放」の象徴的な存在である。後にミシェル・フーコー (Michel Foucault) が、ピネルの功績を神話に過ぎないとしたこともよく知られている。ピネルは1801年に初めて道徳療法 traitement morale の語を用いている。彼は『精神病に関する医学・哲学論稿』<sup>21)</sup>の中で、病院の管理者が「人間性の尊厳と啓蒙主義の原理にもとづいて自分の仕事と取り組むことが必要」と述べ、「厳格におこなわれる作業は、道徳と規律を保つ一番よい方法である。」「運動練習によって、病人の集団に秩序を保たせることができ、内的秩序を保つためのこまごました無意味な規則を、不必要にする。」そして「理性の回復に対して作業療法は確実にでもっとも効果的である。」と述べる。ここにはフーコーが、物質的な鎖からの解放後「道徳

的な鎖が再びはりめぐらされた」<sup>22)</sup>とする所以も伺える。現在の感覚からすれば本書内容は全体に精神障害者に管理的であるという印象は強い。

先のピネルの記述には、すべての人間が理性をもっており、理性による道徳的価値判断をも信頼する啓蒙主義的な見方が明らかであり、作業は人間の理性と自然や社会の理を調和させる働きがあると見做されている。Robert K. Bing<sup>23)</sup>は「狂気 insane に対する道徳療法は啓蒙の時代の1つの成果である」と述べ、道徳療法は「その時期の基本的な姿勢、つまり人間性や社会を統制する一連の原理であって、それは理性へ向かう人間の能力への信頼、個人に最高の信心をみるという姿勢から生まれた」と述べる。啓蒙の哲学は「狂気は悪魔がとりついたもの」というような考えを取り除き、「精神疾患は人道主義者と医師の正当な対象となった」。このように作業療法の前身である道徳療法は、不合理な妄信を払拭しようとする啓蒙の合理主義の精神から生まれたといえる。

また英国のウィリアム・テューク (William Tuke 1732-1812) は、ピネルと同時代に精神障害者の人道的処遇の幕開けに貢献したことで知られている。彼は産業革命後の英国の繁栄のかげで精神障害者の処遇が非人道的であることから、理想的な施設を作ろうとヨーク・リトリートを設立した。このリトリート retreat という語は、一般的に asylum の語が用いられた時代に敢えて名づけられ、一般的には隠遁を意味するが、日常生活の煩惱からの解脱という宗教的な意味も含むという<sup>24)</sup>。彼は精神科医ではなく非専門家として、またクエーカー教徒として改革運動を実践したが、アメリカ合衆国の道徳療法はこのクエーカー (キリスト友会) の一部として移入された<sup>25)</sup>ともいわれている。ウィリアム・テュークの孫にあたるサムエル・テューク (Samuel Tuke 1784-1854) は、クエーカー教徒としての精神と事業を受け継ぎ発展させ、ヨーク・リトリートの実践を報告する文書<sup>26)</sup>を残している。彼は道徳療法に関する章の最初に「精神病の原因についての考えがどんなにちがっても道徳療法が大切であることにかわりはない」と述べている。そしてこの施設の治療結果が良いのは「患者を理性をそなえた存在」とみるからであるという表現には、やはり啓蒙の精神が反映されている。

道徳療法の開拓者たちは、「理性の光」対「狂気の暗闇」という図式があり、精神障害者の治療とは理性の回復であった。ピネルやテュークの処遇改善を「道徳的な鎖」と批判したフォーコーは、『狂気の歴史』の序言で、この理性と狂気という対立図式を「〈理性〉 - 〈非理性〉の関連」に置き換えながら概ね次のように述べている。理性の光、「澄み切った世界」が非理性としての精神病をつくりだしており、理性と非理性は病気という抽象的な普遍性を通してしか関係を認めない。抽象的な理性は秩序を通して理性の人としか交流をもたない…という。そして「理性の主張する理性の完全さを根拠としないで、理性と非理性のあの切断の働き、両者のあいだにつくられたあの距離、理性と理性ならざるものとのあいだに設定された空白について語る必要があるだろう。」<sup>27)</sup>と主張する。このような理性による区分、理性による関係性の断絶、理性が見出す秩序による統制は、道徳療法にもあるし、なおさら現代の医療活動や作業療法にも存在する。



## ロゴスへの遡源

### ラティオとヴェルブム

19世紀の作業療法である道徳療法は、以上のように啓蒙時代の理性から生まれたのだが、道徳療法の「理性」は、フーコーのいうようないわば「分断する理性」と同じなのだろうか。理性 reason はラテン語のラティオ ratio に由来するが、ラティオはさらにギリシア語のロゴス logos に遡る。ロゴスといういわば西洋哲学史の根幹に触れることは憚られるのだが、ロゴスに纏わる語史には、この小論においても着目すべき点があるように思う。つまりロゴスはラテン語に移されるときに、ラティオともう一つ別のヴェルブム verbum という2語に分かれて受け継がれた<sup>28)</sup>、ということである。

ヴェルブムは坂部恵の解説<sup>29)</sup>に従うと、「(世界を) 生み出すことば」「息吹」という意味、新約聖書の「はじめにことばがあった。ことばは神とともにあり、ことばは神であった」の「ことば」、神言であり、「生きてはたらく言葉」<sup>30)</sup>を意味する。

一方のラティオは神学とは分離する哲学の王道を歩み、近代合理主義につながり、われわれにとって自明の理である科学的合理性としても受け継がれる。ロゴスはラティオの系譜において、神話的な空想ばかりではなく、物語、土着の感覚や個々の感覚・感情を伴った表象をもきれいに削ぎ落とされていく。われわれが普段使う「理性的」や「合理的」という言葉は、このラティオの先端の、洗練されたというよりは痩せ細った、効率のよいリーズナブルなすがたである。「分断する理性」もまたラティオの系譜であろう。

ロゴスのもう一方のヴェルブムは、哲学の表舞台ではなく「地下水脈」のように受け継がれるが、近代の典型的なあらわれとしてはヘルダー (Johann Gottfried Herder 1744-1803) の『言語起源論』(1772) が挙げられる。この中でヘルダーは古代の初源的な言語に「感性的要素、すなわち生き生きとした感性的表現や隠喩的表現が多いこと」<sup>31)</sup>を見出した。ヘルダーの用いた語 Gefühl (「感性的なものから精神的なものに至るすべての『感情』のニュアンスを一度に意味している」<sup>32)</sup>) が、「理性ないし悟性の対立概念として感性的なものの総体であり、反啓蒙主義運動としてのシュトゥルム・ウント・ドラングの合言葉となった」<sup>33)</sup>という。とするならば、ロゴスのヴェルブムの流れは、近代においてはロゴスの主流であるラティオの合理主義に相対するロマン主義につらなるともいえよう。ロゴスの内に今日の理性だけではなく、ヴェルブムの「生きてはたらく言葉」という生命的・神秘的な意味が含まれていたことは示唆的である。近代合理主義を生んだロゴスは元々、近代からすればロマン的と思える意味をも含んでいた。

ヴェルブムの「ことば」は、理性の言語のように概念形成されたものではなく、未だ混沌のなかにある響きが内的な響きとして転換され、「かたち」をなすことをいうのだろう。声がことばとして内に響くときの大きい転換は、人間の創造の原形を成している。ヘルダーは「人間は動物としてもすでに言語をもっている。」「すべての始源の言語には、これらの自然的音声の名残りがなお鳴り響いている。」<sup>34)</sup>という。概念形成をし

ないヴェルブムは現代からすれば非合理であるが、パトスを表現する「融合する理性」であるともいえよう。

#### 道徳療法に潜在するロマン的な精神

ロゴスからヴェルブムへの流れを基にして道徳療法の「理性」をみるとき、それは今日の科学的合理性へと向かう知性とは異なるということが、テュークの報告の中で引用されている以下の詩にも見出すことができる。

— 光の秩序の夜明け；

静かな秩序がよみがえる。  
あたかも太古の混沌のなかから、  
神のみ声 voice に応じて大自然の雑然とした種が、  
それぞれの場所へ戻っていくように、  
ついにはバラ色の大地が、  
そのかぐわしき肌をのぞかせて、  
輝かしい太陽が青空に上る。  
かくしてすみやかに解放された  
全理性 reason entire が出現する。

The Pleasures of Imagination, Book III. I, 396.<sup>35)</sup>

この詩には、啓蒙の「暗闇に光をもたらす」ということが、「自然」の光景と「理性」の出現とを重ねることで表現されている。「神のみ声に応じて」とは「はじめにことばありき」を連想させ、「種」とはクエーカーにおいては「神の直接性と力のもつ不可思議さを暗示」<sup>36)</sup>していることを考えるとき、この詩の中にある「理性」は、ラティオの系譜ではなくヴェルブムの系譜にあるといえよう。道徳療法は、“妄信”を排除しようとする啓蒙の合理主義から生まれたのだが、そこにある理性・合理は、“信”を排除した客観的な“知”ではなく、生命的で動的な“信”が“知”を支えて働いている、ということを観ずるべきであろう。「自然」においてヴェルブム「生きてはたらく言葉」は、どこそこの言語ではなく、しかし風土としての密着した感覚を超えることなく、「声」として人間の生活の底に脈々と流れている。ロマン主義の哲学者シェリング (Friedrich Wilhelm Joseph Schelling 1775-1854) の言葉を借りるなら「自然は眼に見える精神であり、精神は眼に見えない自然である」<sup>37)</sup>ということであろう。精神障害者の人道的処遇を求め、理想的な施設を想像していた道徳療法の開拓者たちは、既存の知に盲目的に従うのではなく、自らの感性で「眼に見えない自然」を感得する必要があった。

道徳療法の理性は、無情の言語によって分断する理性ではなく、「生きてはたらく言葉」、情緒的な理性とでも呼べるような通路を求めて融合する働きであると考えられる。そのことはテュークが「感情」や「情緒的な響き」に注目していたことによっても

示すことができる。例えば、テュークは無関心や親愛の情がなくなるのは、精神病者の「不幸な症状」としながらも、精神病患者から「愛情が全く失われているのではない」ことを観察する。また患者の「感情の疎隔」は病気のみによるのではなく非人間的な環境によることもあると述べ、「人類全体が患者の敵に見えるような悲しむべき状態になっても、それでもなお感情が失われていないことは、患者が動物に対して示す愛着によくあらわれている。」「(精神病患者が精神の激しい昂奮の後)、私はまれならず彼らが感情の動きを見せること、彼らが喜んだり、楽しんだりできることを確認している。」<sup>38)</sup>という。

分断する理性からすれば、感情はひとつの対極であり、未分化な混沌であるのかもしれない。そして一般にロマン主義は、啓蒙の理性主義への反発であり、反理性としての感情を尊重した。道徳療法は表層としては理性主義であるが、人間の理性分有のしるしとして感情と共感という生命的な働きを認めるという点ではロマン主義的な精神が潜在する。

## おわりに

作業療法という発想の源、作業療法の背景にありそれを支える知を問うとき、以上の論述においてすら、合理主義とロマン主義、合理と非合理、科学と芸術・宗教という相反するもの、次元が異なるものが混在している。各々の前者は作業療法の表層にあり、意識的言語的であり、障害を同定して目標や手順を定めることに貢献する。後者は現代の作業療法において積極的に示されることはないが、地下水脈のように受け継がれ、時代に応じた言葉となって語られるべきことであろう。歴史的に見れば作業療法は後者によって与えられる力によって生まれ、社会的な運動と共に興ったということも事実である。そのことは現在の個々の作業療法士においてもいえることであり、前者と後者の思考の往復運動が止まるとき、その作業療法士の実践は作業療法という生きてはたらく実践ではなくなると思う。

## 註

- 
- 1) 長井和男 他編：ロマン主義教育再興。p1, 東洋館出版社, 1986. (引用はボルノーによる序文)
  - 2) 拙論：作業療法における教養の意義。健康科学大学紀要(6), pp 195-205, 2010.
  - 3) 拙論：作業療法教育と教養—作業と表現の世界。OT ジャーナル46(4), pp 330-334, 2012.
  - 4) Hocking, C.: The romance of occupational therapy. In: Creek, J., Lawson-Porter, A.: Contemporary issues in occupational therapy: Reasoning and reflection. pp 23-40, John Wiley & Sons, 2007.
  - 5) 島岡 茂：ロマンティックの歴史。紀伊國屋新書 A-76, 1975.
  - 6) 同書, p 15.
  - 7) 同書, p 18.
  - 8) 同書, p 25.

- 9) Hocking, C.: The way we were: Romantic assumptions pioneering occupational therapists in the United Kingdom. *British Journal Occupational Therapy*, 71(4), pp 146-154, 2008.
- 10) Schemm, R. L.: The influence of the Arts-and-Crafts Movement on the professional status of occupational therapy, *American Journal of Occupational Therapy*, 41(4), pp 248-253, 1987.
- 11) Hocking, C. (2007): *ibid.*, p 29. (この引用文の訳は以下を参考に一部改変した)  
五島 茂 編: 世界の名著41 ラスキン モリス. p 12, 中央公論社, 1971.
- 12) 同書, p 12.
- 13) 同書, p 13.
- 14) Hocking, C. (2008): *ibid.*, p 30.
- 15) Schemm, R. L. (1987): *ibid.*, p 250.
- 16) Hocking, C.: The way we were: thinking rationally. *British Journal Occupational Therapy*, 71(5), pp 185-195, 2008.
- 17) Hocking, C.: The way we were: the ascendance of rationalism source: *British Journal of Occupational Therapy*. Volume 71(6), pp 226-233, 2008.
- 18) Kielhofner, G. (著), 山田 孝, 他 (訳): 作業療法の理論 原書第3版. pp 30-31, 医学書院, 2008.
- 19) Peloquin, S. M.: Moral Treatment: Contexts Considered. *American Journal of Occupational Therapy*, 43(8), pp 537-544, 1989.
- 20) 木田 元: 現代の哲学. p 36, 講談社学術文庫, 1991.
- 21) Pinel, P. (著), 影山任佐 (訳): 精神病に関する医学=哲学論. 中央洋書出版部, 1990. (この著作の道徳療法に関する箇所は以下にも訳出されており、引用はすべてこれに従った。)  
秋元波留夫 (編): 作業療法の源流. pp 23-51. 金剛出版, 1975.
- 22) Foucault, M. (著), 神谷美恵子 (訳): 精神疾患と心理学. p 125, みすず書房, 1970.
- 23) Bing, R. K.: Eleanor Clarke Slagle Lectureship-1981. Occupational therapy revisited: a paraphrastic journey. *American Journal of Occupational Therapy* 35(8), pp 499-518, 1981.
- 24) 秋元, 前掲書, p 318.
- 25) Peloquin, S. M. (1989): *ibid.*, p 537.
- 26) Tuke, S.: Description of the Retreat: An Institution Near York, for Insane Persons of the Society of Friends. pp 131-187, *Biblio Life*, (1813) 2009. (この著作の道徳療法に関する箇所は秋元, 前掲書 pp 116-138に訳出されており、引用はこれをもとに行った)
- 27) Foucault, M. (著), 田村 俣 (訳): 狂気の歴史—古典主義時代における. pp 7-9, 新潮社, 1975.
- 28) Gadamer, H. G.: *Wahrheit und Methode*. p 425 J. C. B. Mohr, (1960) 1990.
- 29) 坂部 恵: モデルニテ・バロック—現代精神史序説. pp 52-53, 哲学書房, 2005.
- 30) 同書, p 94.
- 31) Herder, J. G. (著), 木村直司 (訳): ヘルダー言語起源論. p 206, 大修館書店, 1972. (訳者による解説から引用)
- 32) 33) 同書, p 212.
- 34) 同書, p 3, p 9

- 35) Tuke, S. : *ibid.*, p 180. 邦訳, pp 134-135.
- 36) Kelly, R. T. (著), 小泉一郎・小泉文子 (訳) : 内なる光 信仰の遺言. p 19, 教文館, 1999.
- 37) 松山壽一 (編) : シェリング著作集 第1 b 巻 自然哲学. p 69, 燈影舎, 2009.
- 38) 秋元, 前掲書, pp 117-119.

## Abstract

This article first reviews literatures which show that there are romantic assumptions about the curative power of the arts and crafts among early occupational therapists in Britain. Thereafter, it discusses about philosophy of Enlightenment reason underlying moral treatment. The study focuses the fact that the Greek term 'logos' is translated into both 'ratio' and 'verbum' in Latin. From this point, it can be considered the reason of the moral treatment is descended not only from ratio but also from verbum. Providing evidence that the reason of moral treatment is accompanied with emotions, the study showed the pioneers of moral therapy have romantic thoughts implicitly. Such findings suggest that occupational therapists could perform their practice meaningfully by incorporating a romantic element in their rational thought.

Keywords : occupational therapy

Romanticism

Arts-and-Crafts Movement

moral treatment

reason

verbum